武蔵野日曜聖書講筵
全き幕屋
――ヘブル書第９章――

１９８９年12月17日
小池辰雄

祈り　至聖所の贖罪所　永遠の贖罪　永遠の御霊　永遠の嗣業　ベートーヴェン記念碑除幕式のグリルパルツァー演説　アンデルセンの「マッチ売りの少女」祈り　召団讃歌D3「マッチ売りの少女」

【ヘブル９】

1 初の契約には礼拝の定めと世に属する聖所とありき。2 設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と称え、その中に燈台と案と供えのパンとあり。3 また第二の幕の後ろに至聖所と称うる幕屋あり。4 その中に金の香壇と金にて遍く覆いたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、5 櫃の上に栄光のケルビムありて贖罪所を覆う。これらの物につきては、今一々言うこと能わず、6 此等のもの斯く備わりたれば、祭司たちは常に前なる幕屋に入りて礼拝を行う。7 されど奥なる幕屋には大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために献ぐる血を携えて入るなり。8 之によりて聖霊は前なる幕屋のなお存するあいだ、至聖所に入る道の未だ顕れざるを示し給う。9 この幕屋はその時のために設けられたる比喩なり、之に循いて献げたる供物と犠牲とは、礼拝をなす者の良心を全うすること能わざりき。10 此等はただ食物・飲物さまざまの濯事などに係り、肉に属する定めにして、改革の時まで負わせられたるのみ。

11 然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、12 山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。13 もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、14 まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。15 この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん為なり。16 それ遺言は必ず遺言者の死を要す。17 遺言は遺言者死にてのち始

めて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。18この故に初の契約も血なくして立てしにあらず。19モーセ律法に循いて諸般の誡命をすべての民に告げてのち、犢と山羊との血また水と緋色の毛とヒソプとをとりて、書および凡ての民にそそぎて言う、20『これ神の汝らに命じたもう契約の血なり』と。21また同じく幕屋と祭のすべての器とに血をそそげり。22おおよそ律法によれば、万のもの血をもて潔めらる。もし血を流すことなくば、赦さるることなし。

23この故に天に在るものに象りたる物は此等にて潔められ、天にある物は此等に勝りたる犠牲をもて潔めらるべきなり。24キリストは真のものに象れる、手にて造りたる聖所に入らず、真の天に入りて今より我等のために神の前にあらわれ給う。25これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入るごとく、しばしばおのれを献ぐる為にあらず。26もし然らずば世の創より以来しばしば苦難を受け給うべきなり。然れど今、世の季にいたり、己を犠牲となして罪を除かんために一たび現れたまえり。27一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることとの人に定まりたる如く、28キリストも亦おおくの人の罪を負わんが為に一たび献げられ、復罪を負うことなく、己を待ち望む者に再び現れて救を得させ給うべし。

●祈り

始めに祈ります。主さま、年の終わりが近づいてきまして、クリスマスを来週は迎えようとしておりますが、この待望の一週間を待ちながら、今、今年の終わりから二番目の集会をしようとしております。いろいろな事情で来れない人が多くありますが、しかし、どうぞ今、来つつある人の足を速めてくださるようにお願いいたします。また、病める人たちが来れませんが、どうぞ、日曜日において彼等に御霊の力を与え、病を癒してくださるように願い奉ります。また、今日は、このようにして、ヘブル書の９章をとおして福音の中心であるところのことを学びたく存じております。どうぞ、おん導きくださらんことを願い奉ります。尽くしませんが、心からの感謝と祈り、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名に在って捧げ奉ります。アーメン！

●至聖所の贖罪所

それでは、ヘブル書の９章にはいります。ヘブル書というのはパウロが作ったと初めは思われていましたが、パウロではどうもなさそうです。そういうことは最初に何も書いてない。旧約をひっくるめて、本当の新約はこういうものだということをユダヤ人に知らせるための特別な音信です。しかし、このヘブル書があるのにかかわらず、ユダヤ人はこれをなかなか受けとらないわけです。

1 **初の契約には礼拝の定めと世に属する聖所とありき。**

「礼拝の定め」というのは、出エジプト記25章にだいぶ詳しく出ています。

2 **設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と称え、その中に燈台と案と供えのパンとあり。**

これはだいぶ整った形の幕屋です。出エジプトして旅をしていた時の幕屋は内容的にはこんなに整っていない。ただ、神との出会いという意味おける出会いの幕屋と、住む幕屋との二つでもって旅行していたわけです。だから、これはちゃんと礼拝的に改訂をなした幕屋です。

3 **また第二の幕の後ろに至聖所と称うる幕屋あり。**

大体、東に向かいている。

4 **その中に金の香壇と金にて遍く覆いたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、**

アロンの杖に芽が生えたんだね。アロンはモーセの兄貴です。旧約の「石碑」のことはむしろ出エジプト記24章の方に出ている。

5 **櫃の上に栄光のケルビムありて贖罪所を覆う。これらの物につきては、今一々言うこと能わず、**

両方からケルビムが、天使が羽をのばして相対している。そして、その両方の前に贖罪所がある。贖罪所があるということが非常に大事なことです。律法の入っている箱の上に贖罪所があるんですから、旧約の上に新約があるといったような形が初めっからできているわけです。ただ贖罪の仕方が、旧約は動物によってやるんですが。

6 **此等のもの斯く備わりたれば、祭司たちは常に前なる幕屋に入りて礼拝を行う。**

こっちの至聖所でない方の幕屋です。これ全体が幕屋ですから。こちらで礼拝するのが祭司たちです。

7 **されど奥なる幕屋には大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために献ぐる血を携えて入るなり。**

これは出エジプト記30章に出ている。

中国の天壇は三重の大理石の壇になっていて、まん中に丸い石がある。清朝の天子が年の暮れに一遍ここに立って、民の罪の執成しの祈りをする。そして、生贄の炉が後ろの方にある。これは旧約とちょっと似たような形なんで不思議なんです。

●永遠の贖罪

この形を今度はキリストがみずからなさったわけです。

8 **之によりて聖霊は前なる幕屋のなお存するあいだ、至聖所に入る道の未だ**

顕れざるを示し給う。

「前なる幕屋のなお存するあいだ」とは即ち、こっちの幕屋がまだあって、両方あるということなんですが、新約になると、前なる幕屋が要らなくなってしまうわけです。

「至聖所に入る道の未だ顕れざるを示し給う」

というのは、そういった言い方なんです。まだ本当の新約的な契約ではないということです。旧約的な相の契約だということ。

9**この幕屋はその時のために設けられたる比喩(たとえ)なり、**

本当の礼拝、本当の幕屋の一つの型であって、しかし、本当の至聖所は実はこれですらもなくなってしまうと。

之に循(したが)いて献げたる供物(そなえもの)と犠牲(いけにえ)とは、礼拝をなす者の良心を全うすること能わざりき。

良心は罪のとがめがあるから、本当の意味では本当の平安はそれではこなかったということ。

10**此等はただ食物(くいもの)・飲物(のみもの)さまざまの濯事(すすぎごと)などに係り、肉に属する定めにして、改革の時まで負わせられたるのみ。**

「改革」とは面白い言い方ですね。しばらく、本当の大改革、新約の大改革まではこのすがたで来たんだと。これがいわゆるユダヤ教の礼拝の仕方である。ところが、そうではないんだぞということをはっきり言おうとしているわけですね、その次から。

11**然れどキリストは来(きた)らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、**

「来たらんとする善き事」とは新約のことです。今日は「全き幕屋」と題したんですが。

12**山羊と犢(こうし)との血を用いず、己が血をもて只一(ただ)たび至聖所に入りて、**

キリストは自分が大祭司となり、自分が羔羊(こひつじ)となったわけです。「全き幕屋」というのはこういう形式のものではなくて、霊的な本当の幕屋ということです。

永遠の贖罪(あがない)を終えたまえり。

この９章のところに「永遠」という言葉が三回出てくるんです。「永遠の贖罪」だから、ただ一遍きりで、もう再び要らないんだと。それは即ちゴルゴタの上の十字架のことです。十字架が至聖所なんです。まぁ、ひどいもんです。十字架というのは一番呪われたすがたなんです。一番呪われたすがたをもっとも神聖なるものにキリストは変えた。十字架の贖罪ということが、もう他には要らない、ただ一回だと。ただ一回の中に永遠性をもっている。ただ一回の中に永遠性をもっているということは、キリストが二千年前に十字架にかかられたことは歴史的な一回の事態ですね。歴史的な一回が、これが単なる歴史的な一回でなくて、永遠性を持った一回である。

だから、永遠性を持った一回ということは、常に新たに我々一人一人に対して一回性を

もって現れてくる。我々の過去・現在・未来の罪過は全部、この一回性でもって完全に贖われきられている。だから、これは完全な贖いなんです。「全き幕屋」の全さはそこにある。これは

「全き贖罪」

なんです。全き贖罪ということは、我々の自我が罪なんだから、自我が全部贖い尽くされる。相対的現実は、我々はあいかわらず罪びとです。躓いたり転んだりしている。けれども、それを完全に贖ってしまっているんだから、

「相対的な現実を心配するな。絶対的な現実の中にお前はもう入っているんだ」

と。これが一回性の、一回性にして永遠性をもっているものです。それを本当に祈りの世界で冥想してみてください。それはもう、聖いの聖くないのという、そんな相対的な概念ではなくなってしまう。もう言葉にならんです。

私は今から、来年の講筵は、非常に極端に言うと、始めから終わりまで全部異言になってしまうかも知れないと思っているくらいです。

「先生は何をしゃべっているのか訳が分からない」

なんて。

●永遠の御霊

まぁ、そういうわけで、パウロは本当に受けとりました。この贖罪、キリストの一回性にして永遠なるものは、これを本当に受けとったら大変なことになる。それを相対の波の奥に、波でないところの深い世界。あるいは、雲の上の高い世界です。そこがその贖われたる「根源現実」です。それが根源の現実です。根源という言葉を使いたいのは、そこなんです。絶対に観念ではない。

「十字架は我々の罪を贖いました」

なんて、命題を信じているんじゃない。普通はみんなそれです。単なる気やすめだ。気やすめなんてものではない。根源現実です。だから、滅びはないんです。

「いつ死のうが一向差し支えない。絶対に死にませんぞ」

という現実。贖われきったところには何が入ってくるか。もう言わずもがなで、聖霊が入ってくる。必ず聖霊が入ってくる。聖霊は入らざるを得ない。その贖いの根源現実で、

「主さま！」

と沈黙の叫びをする。直ちに、聖霊の世界です。キリストと一つになっている世界。だから、

永遠の贖罪（あがない）を終えたまえり。

という。永遠の贖いをいただいた。

お釈迦さんはいろいろな経路を通って、やっと菩提樹の下で悟ったんだ。そんなのと違うんですよ、キリストは。だから、キリストは――私はなにも仏教をけなしはしません。

もちろん、その世界には素晴らしいものがそれぞれありますけれども――もぅ、全くけたが違う。キリストは大変な方ですから。

12山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。

十字架という至聖所に入って――ここに呪いの極みのすがたの十字架があるわけです――「永遠の贖罪を終えたまえり」というのは素晴らしいね。

13もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、14まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。

ここに「永遠の御霊」という言葉があるでしょ。「永遠の贖罪」に「永遠の御霊」。十字架が永遠です。また、この聖霊が永遠の御霊です。永遠の御霊によって永遠の贖いをなさったキリストが、これでお終いになるわけがない。これ（十字架）は果たされた。

けれども、永遠の御霊は、これは永遠に続く。十字架は一回性です。聖霊はもう永遠性を持っている。続いているんだ、ずーっと。だから、キリストは甦らざるをえない。死から永遠の生命に移らざるを得ない。「プシヘー」としての肉体は滅びました。けれども、その中から「ゾーエー」としての、「永遠の生命」としての生命が現れてくる。

これは聖霊の生命、聖霊に包まれている生命。これが復活の生命です。それがまた天界に行かれた。復活の生命として現象した時は、まるで肉体を持っているかの如きありさまです。お魚まで食べてしまった。もぅ、考えられないことです。だから、しょっちゅう私は言っているでしょ、

「参りました。聖書のキリストの現実には降参しました」

と。我々の判断なんていうものはどうにもならん。

14まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。

「事えしめざらんや」とは、

「つかえしめないではいられません」

ということ。「奉仕」という言葉は、何か自分から進んで奉仕するように思うですね。けれども、申し上げているとおり、みんな上から力が来るんです。

「奉仕しましょう」

ではないんだ、

「奉仕せざるを得ない」

ということ。仕えざるを得ない、動かざるを得ない、助けざるを得ない、為さざるを得ない。みんな、ざるを得ない人間になるわけですね、聖霊がくると。十字架・聖霊でもって救わ

れちゃうと、ざるを得ない世界に――

「止むに止まれず」

とはギリシヤ語で「アナンケー」と言います――このアナンケー的存在になる。霊的必然です。霊的必然が、ざるを得ないことが本当の自由なんです。本当の自由とは何かというと、

「これかあれか」

という選ぶ自由ではない。この自由は

「かくせざるを得ない」

という、雨が降れば地面は濡れざるを得ないという、自然法則と同じことになる。英語の「マスト」、ドイツ語の「ミュッセン」という「ねばならない」という字は別な角度からは、「ざるを得ない」という字です。そういう内側からの力で動かざるを得ないのが本当の自由という。それは天の法則に従っている。活ける法則に従っている。

「自由」といえば、私はすぐ鳥の姿を思う。鳥の飛んでいる姿というのはいいものだ。こないだも夢の中で私は飛んだからね。羽がないのに飛ぶんだよ、どういうわけだか。飛んで行って、そして按手したりして。昨日も何か不思議な夢をみたな。

●永遠の嗣業

15 **この故に彼は新しき契約の中保（なかだち）なり。**

これは中保者です。ヨブ記にちょっとこの言葉がでてくる。執成すひと。聖霊がこの執成すものです。キリスト自身が執成しの方――大体、祭司というのは執成す人なんだから――大祭司という。神への道、神からの道となった。道そのものが執成しの道なんだ。新しき契約は即ち、

「キリストは必ず来たりたもう」

という内容と、

「我々はその新天新地に救い上げられる」

という、これが新しき契約、約束です。新約はもの凄い希望です。上から与えられているところの希望です。こっちから望むのではない。上からやってくるところの希望です。希望が約束されている。これはヘブル書の中に書いてある。ヘブル書11章に、

「1**それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実（まこと）とするなり。**」（**ヘブル11・1**）

この訳はあまり感心しない。私は別に訳してある。第十巻の「12月18日　慕うところは天に在り」の所に、

「**信仰は望まれおるものの現実、見られざるものの確証なり。**」（**ヘブル11・1**）

と訳した。

「信仰というのは、望まれおるところのものの現実だ」

という。もう先取りしてしまっているわけです。

「天国は汝らのうちにあり」

と先取りしちゃっているわけです。

「やがて来るところの新天新地は、もうお前の中に新天新地が来ているじゃないか。それが信仰というものの現実だ」

と。「見られざるものの確証」である。確かに、見えないものが既に自分の中に来ていると。やっぱり、聖書の言葉は凄いよ。

これ初(はじめ)の契約の下に犯したる咎(とが)を贖(あがな)うべき死あるによりて、

これはキリストのことです。

召されたる者に約束の永遠の嗣業(しぎょう)を受けさせん為なり。

ここに今度は「永遠の嗣業」という言葉が出てきた。「永遠の贖罪」「永遠の御霊」そして「永遠の嗣業」。嗣業(ゆずり)です。神の国を受けとるところのゆずり。神の民となることの事態、それがこの「永遠の嗣業」ということです。だから、「選びの民」です。

「イスラエルの民は選びの民だ」

なんて、そういうわけじゃない。歴史的には選びの民だったけれども、

「俺たちは選びの民だなんていい気になっていると、とんでもないぞ、天国に入れないぞ」

と、キリストに言われているんだ、あのご連中は。イザヤ書の中にも、

「我を求めざる者に見出される」

なんて書いてある。我々はキリストを求めざる者であったが、これがキリストを見出すことになった。

まぁ、イザヤ書を読んでいると、イザヤ書というのは凄いよ、本当に。全聖書をイザヤ書はもう既にもっている。イザヤ書全66章。イザヤ書だけを破ってポケットにいれておいて、読んだっていい。

皆さんはいろいろなものをお読みになるでしょ、文学でも哲学でも歴史でも音楽でも。そうすると、みんな聖書の光でもって全部見えてくる。そして、それにもっと凄い内容を盛ることができるようになってくる。聖書の根源の世界というのはなんと凄いか。偉大な文学も音楽も彫刻も何でも、最高のものはみんな根底は聖書の力から来ている。ダンテでもゲーテでもシェークスピアでもみんなそうです。聖書というのは大ドラマだよ。

16**それ遺言は必ず遺言者の死を要す。**17**遺言は遺言者死にてのち始めて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。**

死ななければ効果がないと、遺言のことが書いてある。まぁ、その後はどうでもいいです。

23**この故に天に在るものに象(かたど)りたる物は此等にて潔(きよ)められ、天にある物は此等に勝(まさ)りたる犠牲(いけにえ)をもて潔めらるべきなり。**24**キリストは真(まこと)のものに象(かたど)れ**

る、手にて造りたる聖所に入らず、真の天に入りて今より我等のために神の前にあらわれ給う。

この「天」というのは霊界のことです。まぁ仕方がない、我々には何か知らんけれども、上の方という天という言葉を使う。「天」という言葉はおもしろいね。どこでもやっぱり天という言葉は、特に中国はこの天が霊界を表す大事な言葉になります。「天地」という。これも一つになっちゃう。そして、我々はこの穢土（えど）に、しょうがないこの人間はこの罪の世にありながら、そこを天国に化しながら歩いている。それをはっきりなさったのが福音書のキリストです。キリストは天国を現じながら歩いておられた。黙示録の最後の世界を実はもう既にキリストは福音書において現しておられた。

●ベートーヴェン記念碑除幕式のグリルパルツァー演説

ところで、今日はどういう日だか知ってますか。12月17日。ある有名な人が生まれた日なんだ。私の書斎にかかっている人だ。ベートーヴェンの生まれた日です。彼は１７７０年12月17日に生まれ、１８２３年3月26日に天界に行った。私は大学時代にベートーヴェンのドイツ製のあの写真を買った。あの時に五円だったたね。あの時に五円というお金は大変なお金だった。ほとんどお小遣いは他に無くなってしまった。神田の地球堂で買った。ずーっと私の書斎にかかっている。おっかない顔をしているよ。睨みつけている。子供たちが恐い恐いと言う。そんな体裁のいい顔をしてないんだ、ベートーヴェンは。彼は本当に戦ったからね。

『ウィーンの辻音楽士』という本の終わりの方に、あの時のオーストリーの大詩人はグリルパルツァーというんですが、グリルパルツァーがベートーヴェンの記念碑の除幕式に語った言葉がある。非常に素晴らしい言葉です。それともうひとつは、ベートーヴェンの墓の前で、１８２７年3月29日と１８２７年の秋。これは素晴らしい演説ですから、ちょっとご参考に紹介します。

「我らここに今や帰らざる客となれるベートーヴェンの墓の前に立って、あたかも一全国民、ドイツ全民族に代わりて彼を弔う心地す。悲しいかな、我ら郷土の芸術、我らが祖国の精華の消え去れる光輝にして今なお我らに残されたる誉れ高きかたわれは仆れたり。我がドイツの言の葉をもて詠う英雄は今なお活けり。彼の生命永からんことを。然れども、響く歌の最後の巨匠、音の匠の優しき唇。ヘンデル、バッハを継ぎ、ハイドン、モーツァルトを進めて、不朽の名声をかち得たる彼は死せり。楽の響きは消え果てたり。我らその絶たれし弦（いと）のほとりに立ちて泣く。

楽の音は響き絶えたり。我をしてかく彼をよばしめよ。まことに彼は芸術（たくみ）の人なりければなり。彼の在りしところのもの、そはただ芸術によりてのみありし。生命の棘（はり）は深く彼を傷つけたれば、舟破れし人の岸にすがる如く、おお、汝、善と真の友なる

いみじき姉妹（美の世界、音楽）、憂悶を慰める姉妹、天より降れる芸術よ、汝が腕に逃れたるなり。彼は汝を抱きて離たざりき。汝が彼のもとに通い、彼に語りしその門の閉ざれし後も、聾たる耳にもはや汝が面を仰ぎ得ざりしのちも、常に彼は汝が姿を胸に抱き、その死するや、汝が姿はなおその胸上に横たわりいたり。

彼は芸術（音楽）の人にてありし。誰かあえてその傍らに立つを得ん。

巨獣ベーヘモート（カバを想像する怪獣。ヨブ記40章にでてくる）が大海を湧きてく震うが如く、彼はその芸術の極みを飛翔し尽くしたり。じじたる鳩鳥の歌より雷霆のはためきに到るまで変幻きわまりなき技巧の絶妙なるもつれより、かたどられしものすべて、あい争う自然力の混沌のうちに溶けゆくかの畏るべき果てに到るまで、彼は一切を測り尽くし、一切を捕らえ得たり。後より来たる者、誰かよく彼に継ぐものを得んか。ただ新たに始めんのみ。そは彼の終わるところは即ち芸術の終わるところなればなり。云々」

今度は記念碑のところで、

「今を遡る半歳、我らここに立ちて悲しみ嘆けり。我らここに友を葬りたればなり。今や我ら再びここに集う。我らをして雄々しく強からしめよ。我ら今、証者を讃ふるなればなり。無常流転の流れは彼を永遠未知の大海に運び去れり。儚き現世を逃れて、彼は今や夜の大空に星辰の如く輝く。彼は今や史上の人となれり。然れば、彼を語るを止め、我ら自らにつきて語らしめよ。我らここに碑を建てたり。彼が芸術に形見にせんためなるか。我は徴とせんためなり。彼が遺骨を埋むる所にぬかずき、掌を合わせ、その土に接吻すべき場所を我らが末に知らさんためなり。その日はありし日の彼自身の如く簡素にしてまたかつ大ならず。大ならんか、ただ彼の偉大に比して笑われんのみ。ベートーヴェンがその面に刻まれたるのみ。これ即ち最高の紋章、侯伯の秘宝、王者の冠なり。これをもて我ら今は亡きこの人より永遠の訣別を告げ、千古不滅の精神の形見を得ん。軽重浮薄なる今日の世に感激の瞬間はいと稀なり。汝らここに集まれる者、更にこの墓に近づき来たれ。汝らの眼差しをこの土に注ぎ、この人につきて汝らの知れるところのものに一切の思いをしとめよ。而して、この晩秋の霜気の如く情念の戦慄を汝らの骨髄に徹せしめよ。この尊き想い出を別の如くに恵み深き救いの火の如くに汝らは家に携え帰り、これを被いこれを守れ。軽重浮薄なる今日の世に感激の瞬間はいと稀なり。汝ら自らを潔めよ。ここに横たわれる者は感激の人にしてありし。ただ一つを志しつつ、ただ一つを思いつつ、ただ一つのために忍びつつ、ただ一つのために一切をうち棄てて、彼はその生命を終えたり。妻をも知らず、子をも知らず、喜びうすく、楽しみに乏しく、一方の目彼を罪に落とさばこれをえぐりて進み、たゆまず屈せず、遂に志を遂げたり。支離滅裂なる今日の世にありて、なお全きを解する心、我らのうちに存するならば、願わくは我らをして彼が墳墓においてこ

れを集めしめよ。さればこそ古(いにしえ)より詩人、英雄、歌人、聖者の世にありしは、彼らによりて哀れなる迷える人間の奮い立ちて、その生来と目標とを思い出でんためなりしなり。」

昔の文章で少し分かりにくいところがあったかも知れない。要するに、ベートーヴェンの本当の偉大さというものは到底、墓石でなんか測ることができない。彼は一切のものを顧みず、ただ一つに打ち込んで生涯を貫いた。本当の生き方はみんなそうです。浅く広くやっていたんじゃだめだ。狭く深くやれと。ただし、狭くと言ったって、本当の深さをもってくれば、またもの凄い広さをもってくるわけです。

あの頃はベートーヴェンやゲーテ、シラー、カント、ヘーゲルなどが出た。とにかく18世紀の後半から19世紀の始めにかけてのドイツは大変な黄金時代です。精神的な偉大なご連中が各方面に出た。ベートーヴェンも結局は、神さまの意志に従って、運命にうち勝って行った。魂が神と連なっていた。これははっきりしてます。日本に偉大なものがどうしても欠けるのは、やっぱりこの聖書の世界をもたないからです。内村鑑三先生が、

「偉大なる文学が出でよ」

と、あるところで叫んでいますけれども。まぁ、正直、私もこれから大変だ。

●アンデルセンの「マッチ売りの少女」

暮れになって、ちょっと浮かんでくるのは、アンデルセンの「マッチ売りの少女」です。この本を読まない人はないでしょうね。アンデルセン自身が非常に貧乏な生まれをした。冬になると寒くて困ったような家です。大体、寝台が買えない。そういう貧しい生活をした。あの頃はちょうどマッチが発明された直後なんだってね。それで女の子がエプロンにマッチの束を入れて売り歩くわけです。

自分の靴もないから、大きなスリッパをお母さんにあてがわれた。そのスリッパが脱げてしまった。いたずら小僧がそれを持っていってしまった。裸足でもって雪の中を歩きだした。とうとう寒くなって、路の片隅に腰をおろし、もうしょうがない。マッチをすった。家に帰ったら親父さんに叱られる。一つも売れなかったわけです。それで、マッチをすりだした。そうすると、幻が現れた。鉄のストーブ、御馳走のテーブル、クリスマスツリー。火が消えると、その幻がみんな消えてしまう。最後にはお祖母ちゃんが現れた。星が一つ落ちた。流れ星が落ちたことは人が一人死んだことになっているとおばあちゃんに聞かせられていた。そんな光景も見た。

「おばあちゃん、連れて行ってください」

と、一生懸命で今度は幻が消えないように、マッチをどんどんすった。しかし、その美わしい光景を見ながら、その後で凍えて死んでしまった。元日には、女の子がにこやかな顔をして死んでいる。可哀相にと人たちは言うけれども、この女の子が見た美わしい天国の

夢は誰も知らん。

アンデルセンというのは非常にあれだね……、あれは現実の少女のことではないでしょうけれども、そういった非常に貧しい少女のマッチ売りの姿は見たらしい。それから自分で創作したんだ。

我々の人生も――「夢うつつ」という言葉があるでしょ――夢か現か。ところが、夢こそ現である。我々の信仰の現実こそうつつである。聖書が約束しているところの新天新地。この美わしい地球を損ねてしまって、今に地球そのものがおかしくなるような人類、救いがたき人類。人間の罪というのはいかにひどいもんだか、もぅ、いろいろな事態でもって現れている。歴史はそのドラマだからね。それを最後に黙示録が語っているとおりだ、ひっくり返ってしまう。カタストローフェだ。本当の夢を、天来の啓示を、天来の希望のすがたを、それを現実として生きるのが信仰なんだ。これがヘブル書の11章なんです。

「夢こそうつつなり」

と。私はその「夢こそ現なる」世界を詩でもって書きますから。それは過去にもあった。過去の人物にも、現在にも、未来にも。過去・現在・未来にわたって、東西古今にわたって。もちろん、その中から選ぶんです。これを書き終わるまでは私は絶対に死にません。神さまは決して死なさないです、私を殺さない。烈々たるものがきてますから。それはもぅ、普通の生命力とはちがう。その点でも私は世界の例外者です。

「何とでも言いやがれ、何とでも扱いなされ、結構でございます。罪びとの首で結構でございます」

と。その最初の動機は、兄の死と母の失明です。これに対する

「ディバイン・リベンジ」（神聖なる復讐）

です。その力は表現できない。御霊は有難いですね、聖霊は。私はいつも話が話になりませんけれども、今日はこれで終わりといたします。

●祈り

祈ります。主さま、あなたのご降誕の祝いの時を迎えるにあたり、逆にこの十字架のご恩寵をたまわり、ありがとうございました。どうぞ、私たちはいずこにおきましても、聖書を開けば、直ちにあなたの御言に、力に、光にあずかり、そして、何事にも決して行き詰まらず進むことができることを感謝いたします。どうぞ、私たちにとって、三度の御飯よりも御言が――聖書の根源の御言の響きに聞き入りまして、あなたと一つになること――これが一切の秘訣であることをいよいよ感じておりますが、限りなく、そのところを進ましめたまわんことを願い奉ります。来たるべきクリスマスには、どうぞ、兄弟姉妹たちがやって来て、単なるお祝いではなく、本当にキリストをうちに誕生せしめるところのクリスマスであることができますように願い奉ります。今日来れなかった兄弟姉妹たち、風

邪を引いたり、いろいろな事情があったと思いますが、どうぞ、その所において聖書を開いて、そして、あなたに連なることができますようにお願いいたします。御名に在って捧げ奉る。アーメン！

●（参考）召団讃歌D3「マッチ売りの少女」

召団讃歌D3「マッチ売りの少女」
――アンデルセンの童話に因んで――
（１９８９年12月29日作、小山作之助作曲「夏は来ぬ」の歌調で）

1　雪吹雪く　　大晦日の夜
　街人に　　マッチをひさぐ
　素足のままの　　乙女子よ

2　買う人の　　絶えてなければ
　やむを得ず　　家のはざまに
　寒気のあまり　　蹲る

3　「おお寒い　　マッチを擦ろう」
　乙女子は　　手を火にかざす
　まぼろしの煖爐　　はや消えぬ

4　また灯す　　見えしは夕餐
　その蛾鳥　　歩み来たれり
　消ゆる火に伴れて　　消え去りぬ

5　また點す　　現はれたるは
　樅の木よ　　その灯火は
　み空の星と　　のぼりゆく

6　星一つ　　空より隕ちぬ
　「誰かの死」　　祖母の言を
　憶い出して　　火を点す

7　「おばあちゃん　　伴れて伴れてよ
　天国へ　　伴れてちょうだい！」
　マッチを擦りつづけ　　叫びたり

8　明けそめぬ　　年の始めは！
　雪（往き）まくら　　笑みの乙女の
　美しき　　誰か知る